

## 事例 5

コーディネーター名	黒澤 道子	活動学校	さくら市立上松山小学校
コーディネーター歴	12 年目	経 歴	元保護者（PTA 副会長） 家庭教育オピニオンリーダー

### 1 コーディネーターを始めるきっかけ

さくら市は平成 17 年度から各小中学校に「地域と学校を結ぶコーディネーター」を配置した。それに伴い、上松山小学校でもコーディネーターを配置することになり、以前、PTA 副会長をやっていたことと、当時、家庭教育オピニオンリーダーとして活躍していたことから、さくら市より委嘱され、地域コーディネーターとして活動することとなった。

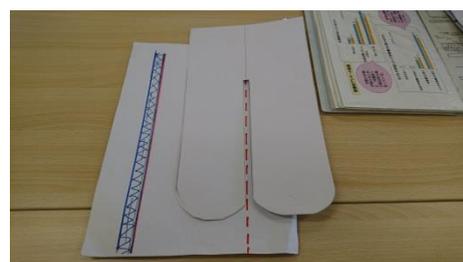
地域コーディネーターとして配置された直後に、学校から「特別支援学級でのうどん作りの支援」の依頼があり活動した。その後、2 年間は全く依頼がない状態が続いたが、「クラブ活動での昔遊びの支援」の依頼が来たのをきっかけに、児童との関わりも増え、そこから活動が活発になっていった。

### 2 コーディネート活動の概要

学校から依頼された活動にはほとんど対応している。具体的な活動は、家庭科のミシン活動補助や生活科のさつまいも作り補助等の授業支援、社会科等の校外学習における引率補助、総合的な学習の時間の米作り指導及び支援、そして授業参観や先生の授業研究会等で下校が早くなった際の「お預かり」（学童に行っていない児童）等である。お預かりには毎回 40 名程度の児童が参加しており、ボランティア側は常時 3～6 名の体制で対応している。

地域コーディネーターは 2 名であるが、1 名は仕事をしているため、実質的な活動は 1 人で行っている。ボランティア依頼に関しては、特に「人材バンク」のようなものを持っていないため、同じ家庭教育オピニオンリーダーのメンバーであったり、知人や以前から学校支援に関わっていたりする人たちに依頼している。コーディネートしたほとんどの活動に参加し、一緒に手伝ったり、様子を把握したりするようにしている。

今年度より、学校が、保護者からボランティアをやってくださる方を募集するようになり、「学校支援ボランティア」と「保護者ボランティア」の両方が協力して行っている活動もある。



「さつまいも作り」の補助教材  
（コーディネーター作成）

### 3 コーディネート活動がうまくいくためのポイント

#### ① 学校からの支援

##### ■ 教職員の理解

学校側の窓口は、地域連携教員（教務主任）のみであるため、連絡が取りやすい。学校から依頼された活動は、地域連携教員との連絡調整の後、活動の担当教員と話し合いをもち、内容を詰めていく。現在はほぼ全ての活動で打合せがもたれている。打合せの内容は活動当日に、コーディネーターからボランティアにしっかりと伝えている。地域連携教員を含め、担当の教員にも恵まれ、活動しやすい環境を整えてもらっている。

##### ■ 情報発信

学校は、コーディネーターやボランティアの顔写真を学校の掲示板に掲示したり、「学校だより」で連携活動を紹介したりすることで、児童や保護者への周知もしっかりと行ってくれている。

## ② 工夫していること

### ■ ボランティアの確保

- ・ボランティアの得意分野を把握し、活動に合ったボランティアをコーディネートしている。無理強いはない。そうすることで、ボランティアの負担軽減になるとともに、活動に参加したボランティアが十分に活躍することができ、「楽しかった」と言ってもらえる。そして、また次につながっていく。やはり、「子どもとのかかわりの楽しさ」がボランティア活動には大切であり、それをわかってもらえると継続した活動につながっていく。
- ・さくら市の他校のコーディネーターと交流を図り、横のつながりを大切にしている。コーディネーター同士で連携してボランティアを紹介し合っている。自分自身も他校の読み聞かせのお手伝いをするなどしている。

### ■ ボランティア活動の際に

- ・活動にはできるだけ参加し、一緒に活動している。自作の説明用教材なども作成し、児童に説明する際に用いている。
- ・子どもに対する配慮は忘れないようにしている。例として、さつまの苗植えの時、指導はしていても、植え方が不十分な苗もできてしまう。その時に、子どもが見ている前で直すのではなく、子どもが教室に戻ってから、そっと手直すなどしている。そうすることで、子どもが満足したまま活動が終えられる。
- ・新しいボランティア(特に「保護者ボランティア」)には、活動が始まる前に、活動の仕方や心得等を丁寧に説明している。そうすることで、活動中のトラブルなどがなくなった。
- ・保護者ボランティアに関しては、活動中に自分の子への集中指導になってしまったり、他のボランティアとの私語に終始してしまったりしたこともあったので、その反省から自分の子どもの活動やグループには入れないということと、守秘の徹底を図ってもらうようにしている。
- ・難しい活動は、特定のボランティアに依頼している。例えば、特別支援学級での支援では、児童への対応に慣れた方に依頼することで、トラブルや児童が傷つかないようにするなどの配慮をしている。

### ■ 反省会の実施

特にコーディネータールームはないため、会議室で活動後に反省会を行っている。課題を吸い上げ、改善点等は、必ず地域連携教員等に伝えている。

### ■ 後継者への引継ぎ

次にコーディネーターをお願いする方として、何よりも人柄が一番大切だと考えている。また、若い方がいいと思うが、若い方は仕事をしていて難しい。自分の中で後継者の候補者がいるので、学校や周囲の人たちとも相談しながら、複数配置の方向で検討している。やはり複数いれば役割が集中せず、負担も少なくて済む。

## 4 コーディネーターとしてのやりがい

大変だと思うこともあるが、子どもたちと関わることで楽しくなる。「子どもたちとの触れ合い」が一番のやりがいである。またコーディネートしたボランティアが喜んでくれた時はうれしくなる。すべては「子どもたちのため」という想いで活動している。

## 5 活動上の課題

ボランティアの高齢化が一番の課題である。若い年齢の人を少しずつ増やしていきたい。

## 6 その他

- ・先生やボランティアの方々に本当に恵まれて活動できている。
- ・もう少し子どもたちと触れ合っていきたい。また子どもたちの楽しい様子を見守ってあげたい。